

お泊り会にて

羊皮紙に落ちたインクの一滴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暑い暑い夏の日のこと。

お泊り会をすることにしました。

2018/12/24	2018/06/25
16	1

目次

「ねえ、青眼鏡」

「何だい」

「暑いから仰いでほしみある」

「脱げばいいよ、全部」

「……」

「あれ、身構えてた痛みが来ない」

「……アリかも」

「まじかー」

そういう、くだらないやり取りがあった。

高校二年の夏。まだ疎遠になりきっていない頃の——ちよつとした、お泊り会の話である。



リンリンのチャンネル登録者数は留まる事を知らず——しかし、初期の初期に比べれば、伸び率は多少、下がってきたかな、という頃。その事に危惧しているのかなんなのかはわからないけど、リンリンの方から「お泊り会をしたい」という打診があった。

こちらとしてはまあ、異論はなかったし。資格取得の趣味や勉強も、別に日を空けたところでどうにかなってしまいうようなカツカツさではないので、そういう休暇もありかな、と思った次第。リンリンの毎日配信を途切れさせるわけにはいかないのですその時は黙るとして、久しぶりにゆっくりするかあ、などと高を括っていたのも束の間桃の間山椒の間。

冷房をつけていようが暑い——という、まあありきたりな熱帯夜で、リンリンと私は——下着姿になっていた。

別に、ソウイウ話じゃない。死ぬほど暑いから、である。

「しかし」

「何」

「色気の無い下着つけてるなあ、って」

「なんで青眼鏡という時に色気のある下着つけないといけないの」
「それはそう」

リンリンは背が低い。多分このまま順当に成長したところで、大学生なのか高校生なのかわからない程度の身長しか得られないだろうし、顔も声も幼いから大人になっても中学生料金でいける、とかが普通_に在り_{そう}である。

幼児体型というわけではないから、一応、ちゃんと胸だの尻だのの膨らみはあるんだけど、如何せん……ね？

「青眼鏡こそ……何、それ。なんで下着に文字書いてあるの？」

「見えない所に透けない程度の柄があるっていう今下火のセンスだよ」

「下火なんだ」

「流行ってはいないでしょ」

ちなみに書いてある文字は
「Slaughter is impossible without
damnation」
なんちゅーもんを下着に書いているのか。そういうロックな所がこのメーカーの長所だ。短所も同じ。

他にも「Backpfeifensocht」とか
「Бумага все теплит」とか、
「moutons de Panurge」等、各言語の……まああんまりプラスなイメージとは言えない言葉が描かれた下着類が売られている。ロックだ……。

「脱いでも暑い」

「アイスでも食べればいい」

「……そうする」

言つて、リンリンは下着姿のまま自室を出て行つた。

……まあ家族にならない、か。私が両親の前で下着姿になったら、「どうとう気が狂ったか、それとも隠す気が無くなったのか」とか言われると思う。余りに辛辣な母親に号泣してしまいうさだ。しないけど。言うとは思うけど。

一分と経たぬ内にリンリンが戻ってくる。手には二本のアイス。所謂。パキつと割つて半分こにするアレ。味はチョコ。

「欲しい?」

「要らんとしたら二つ食べるつもりか」

「照れる」

「欲しい」

「はい」

ハンドタオルに包まれたそれを渡される。こういう気遣いが出来る子になったんだ……私ア感激だよ。そう、こういうアイスつて直持ちすると冷たすぎて痛くなっちゃうんだよね。

そういう気遣いが出来るなら、私の横を通り過ぎる瞬間に背中にアイスを入れてくるとかいうThe・子供染みた悪戯はやめてほしかったかな!

流星に驚いて変な声を出してしまった私を笑って、リンリンは自身のゲーミングチェアにどっかりと座る。

「んあゝ……社長椅子きもちゝ……」

「革は冷たいからね。そして股を開くな女の子らしさが過ぎる」

「胡坐かいてる青眼鏡に言われたくないんだけど」

「それはそう」

蓋を引き抜いて、蓋側の中身を食べて、蓋を捨てて……という最早全人類が手慣れているだろう動作をして、リンリンの方を見る。

「……」

「上手く取れてないのちよつと笑うからやめて」

「交換」

「えー」

しようがないなあ。

口を尖らせたリンリンとアイスを交換する。食べ口がささくれみたいになって、いや余りに下手。リンリンはもう私から受け取ったアイスを美味しそうに食べていて、いや余りに横暴。リンリンからジヤイ〇ンに改名してもいいくらい。ジとンしか合っていないけど。

口を切らないよう気を付けつつ、私も一口。

「んー。変わらない美味しさ」

「ソーダ味好き」

「わかる」

別にチョコ味が嫌いなわけじゃないんだけど、あの爽快感は代え難い。

「あーっーいー」

「アイス体を体に当てればいい」

「溶けるじゃん」

「食べやすくなるよ」

「……冷たい」

「アイスだからね」

Iceが冷たくなかったらそこは別世界だよ。

「そろそろ配信しようかなって思ってる」

「んー。……下着のままやるんか」

「だって、映らないし」

「……映らなければ……カメラの前で裸にもなるのか!」

「うるさ」

そのまま、特に気にする事も無く配信準備を始めるリンリン。これは普段からやってるな?」

「ちよつとまって、服着るから」

「別に青眼鏡は映らないからいいじゃん」

「……羞恥心とか無いのか」

「青眼鏡が恥ずかしがり過ぎなだけじゃ? ストーキング行為とかは

普通にやる癖に、そういうところ初心だよね」

「ストーリーカーチャウが?」

失敬な。最近はどうしてないぞ。

「じゃ、始めるから。あ、声は出していいよ。青眼鏡が来るの、周知の事実だし」

「り」

「もしかしたらゲームやるかもだけど、基本は雑談で……私が質問投げたら応えてもらって」

「私出る前提じゃんやめてよ」

「ミュートにするから」

「……じゃあこっちはフリップボードで答えるわ」

「なんで持ってるの」

「生活必需品だからね」

もしまだ発音の怪しい言語の国の旅行者から話しかけられたらどうするのだ。書けるけど話せない、って言葉がまだ結構あるから、そういう時のためにフリップボードは常に持ち歩かなければならない。

「相変わらず頭悪いよね、青眼鏡って」

「ばーか!」

「ばーか!」

ケツ、準備が良いと言え準備が良いと。

兎にも角にも角煮にも、リンリンが配信を始める。
始めた。



配信中のリンリンは、まあ、多少、キャラが変わる。普段のドギツイ感じが鳴りを潜めて、元気になる。いや学校でもあんな感じだから、ドギツイ感じは恐らく私にだけ出すソレなんだろうけど、やっぱりギャップを覚えてしまうのは仕方ない話だろう。

これは別に自分を偽っているとかじゃなくて、あくまで出力端子を変えているというか、使うチャンネルを変えているというか。どっちもリンリンだけど、学校では元気いっぱいアニーちゃんだし、配信ではみんなのアイドルNYMUちゃんだしで、本質をそのままに出す側面を変えている感じだ。

よって、というべきか、配信中に私の方を向くリンリンは、完全にNYMUちゃんで。けれど容姿はリンリンで。

それはつまり、私の理想たる中学生リンリンにもっとも近い姿なのである。

「A子ちゃんに聞きたい事書いていつてー!」

と、なんだか質問コーナー的なのが始まったらしい。

今はリンリンの背後にいるわけでもないから、コメントは見えない。ベッドに座って、冷たい壁を暑苦しい服越しに感じながら、お休み中。スリープモード。

リンリンの雑談は同時接続数が軽く万を超えるのだが、まあ書き込んでるのは500人から1000人くらいだろう。Vtuberの配信をラジオ感覚に聞いている人も少なくはない。3Dモデルや2Dモデルの表情の変化を楽しむのがVtuberの楽しみ方の一つではあると思うけれど、まあ、雑談配信だと右下や左下にいるVtuber以外に変化の要素がないから、そういう見方になってしまうのも納得は出来る。

「最近ストーカー行為は順調?」

——”ストーカーじゃないが?”

「今迄に成功したナンパの数」

——”2件”

「今日のパンツの色は?」

——”ブロックしろ聞いてきた奴”

二度手間だけど、私の書いたことを一つ一つリンリンがリスナーに話していく。

何度か配信に声に乗ってしまった私だけど、やっぱり好き好んで声を出したいとは思えない。どこまで行っても否定されるのが怖いから、とどめたい。

「私の事、どう思ってる?」

——”友達。百合営業な答えの方が良い?”

「私のチャームポイントは?」

——”八重歯とうなじにある黒子かなあ”

「……」

——”あと、声。リンリンの声は好きだよ、私”

「……ふんだ」

別に。

関係は、戻ったけれど。そこが可愛いと思うのは、変わってないわ

けで。

私は君の声、好きだよ。

「声を聴かせて」

——” 断る”

「マイクに息を吹きかけるだけでいい」

——” 断固”

「自分は今、高校一年生なのですが、勉強についていけずに困っています。A子さんの問題集をいただけませんか？」

——” 金銭が発生する”

「自分は今、36のおっさんなのですが、職場の女の子の話題についていけずに困っています。NYMUさんとA子さんとJKっぽい会話をして、サンプルとしてくださいませんかでしょうか？」

——” 職場の女の子はJKじゃないだろ”

「自分は今、ピチピチのJKなのですが、友達の輪に入れず困っています。友達になってください」

——” 好みの主張と好みの押し付けを違えない事。クールを気取らない事。他人から見ても、話しかけたいな、と思われるような要素を一つで良いから作って、けれど話しかけられるのを待つんじゃない、自分で自分から話しかける事。怯えない。万人に受け入れられるのは無理。友達の輪に入れないのなら、友達の輪を作る事も念頭に置く事。別に友達是一个の輪にしか所属しちやいけない、なんて決まりはないから、色々な所から同好の士を集めた新しい輪を作る事も択になる。あと、遠慮しない事。スタートラインが遠慮だと、拗れるよ”

「長すぎる。ちよつとボード貸して」

ペン習字の資格は役に立ったと言えるだろう。少ない範囲にこれだけの文字を綺麗な字体で収める……！ これは気持ちがいい。

「恋愛相談です。自分は好きな子がいるのですが、どうもその子は腐女子っぽいんです。どうしたらいいですか？」

——” お前の百合好きと何が違う”

「どうしたら強くなれますか？」

——” 運はあるんだからひたすら練習しろ”

それ、私に聞くことか？　つて質問がいつぱい来る。もうちよつとテーマ定めてから質問募集しなよ、とは思う。NYMUちゃんの所に集まるのはやつぱり男子が多いのか、男性目線の質問が多めだ。先のJKは本当にJKかどうかは置いておく。友達の輪に入れない、という所は本当だろうし。

強くなりたい、はもう意味わかんないよね。私は拳闘家かよ。

「ペアルックとか着ますか？　あ、今二人とも下着姿だよー！」

横目でニヤつと笑ってくるNYMUちゃん……いや、この表情はリンリンだな。

何を晒してくれているのか。今全国ネットに私達が下着姿であることがばらされたわけだが。下着姿で配信しているNYMUちゃんがバレてしまったわけだが。

「あはは、暑いからねー。勿論！　風邪は引かない様に気を付けるよ！　いひやあ!？」

——”えっ”

——”えつつつつ”

——”江戸”

——”かわいい”

「ちよ、ちよつと、何、何いきなり……!？」

——”これはA子ちゃんの仕業と見た”

——”やつぱり百合はあつたんだ……桃源郷は、ここにあつたんだ!？”

——”下着姿でくんずほぐれつするJK二人。何も起こらないはずも無く……”

「ちよちよつとミュートするね!？」

——”そんな、ゴムタイヤ!”

——”セツション!”

——”聞かせろー!　見せろー!”

息も絶え絶えにミュートを押すリンリン。

やはり脇と脇腹は全人類の弱点。下着姿の弱点を思い知ったかね。

「ふざけないでくれない?」

「恥ずかしい事を先にしたのはそっち」

「口答え禁止」

そう言って、リンリンは私の腕を掴んで、ベッドへ押し倒す。……なんという早業。そして離れて欲しい暑い。リンリンは私に馬乗りになった後、ベッドに備え付けの引き出しへと手を伸ばす。ごそごそとやって、出てくるのは——縄なつもの

日本には古来より藪蛇という言葉がある。 I t i s .

「乗ったらさらにイラっとした」

「理不尽すぎる」

「なにこれ……また育ってるじゃん」

「膝を胸に当てるのはやめたまえ」

リンリンは慣れた手つきで私の両手を縛り、両足を縛り、胸を一揉みした後以降りた。それいる？

「……立って」

「難しい事を言う」

「こっち来て」

「せめて縄を解くなど」

縛られたままの足では上手く歩けないから、リンリンの補助ありでなんとかかそこ——リンリンのゲーミングチェアの所まで行く。座らされた。

座らされて、座られた。

What? Why?

「うわ、暑い」

「そりゃね？」

「身動きしたり息吹きかけたり、余計なことしたりしたらと太腿触るから」

「どういう脅しなんだ……」

私の縛られている両腕をマフラーみたいに……とかジエツトコースターの安全バーみたいに首に回して、リンリンは配信を再開する。正確にはずっと続いていただけ、ミュートだったから、それを解除したと。

！ペったんこ！

—— A子ちゃんはヨツンヴァインなのかシートなのか、それが問題だ”

—— ” A子ちゃんのデビューマダー？”

「あ、ニヤンさんからなんかメッセが……膝当てはちゃんとする事？ ……なんか勘違いしてない？」

—— ” つーか、あのゲーミングチェアの代わりになれるとかA子ちゃんデカすぎだろ”

—— ” じゃあやつぱりシートなんだ！ 企画でみたことある！”

—— ” ブロックが捗るなあ”

「それじゃ、そろそろ配信終わります！ ちなみにA子ちゃんの胸は、……揉めるくらいはあるよ」

—— ” えつつつ”

—— ” それはつまり揉んだことが”

—— ” やつぱり！ やつぱり百合の園は、理想郷はあったんだ！”

「それじゃ、おつかれ！」

○

「ふう」

「暑い」

「私も」

「……本気で恥ずかしい」

「だろうね。青眼鏡、こういうの本気で嫌いだもんね」

「暑い」

「顔が？」

「どつちも」

ふうん？ なんて言いながら、けれどまだ降りない。配信も配信ソフトも切って、PCも落として、それでも降りない。暑いし、熱いし、汗もべたべたしてて気持ちが悪いけど、これは嫌がらせなので降りない。

これで青眼鏡が下着姿のままだったら良かったのになあ、とか思ったり。まあ薄いパジャマだから、こうして指でツツと撫でてあげれば、面白いようにビクビクするんだけど。

これはもう一回お風呂入らなきゃだなあ。

「でも正直こうなるってわかってたでしょ、悪戯してきた時点で」

「縛られて終わりだとばかり」

「じゃ、予想を裏切れたご褒美だねー。いやあ、快適快適」

首に当たる二つの膨らみ。

京子ちゃんも青眼鏡も、どんどん女の子らしい体になっていく。私はまだ、全然。ずるい。

……柔らかいし、暖かいけど、あつついね。本当に。

青眼鏡は、こういう恥ずかしいのとか、密着とか、それこそさっきの百合っぽい行為とか、全部嫌いだ。苦手で嫌い。やるとドン引きするし、たまに泣きそうになる。

……それが良いんだあ。

「一緒にお風呂入ろつか」

「狭い」

「じゃあ縛られたまま寝る？」

「選択肢に地獄しかないんだけど」

「私とお風呂入るの、地獄？」

「……何もしないと約束できるなら、いいよ」

こういうことしてくる私の事は、多分、結構苦手に思ってる。嫌いまで行くかはわからないけど、かなり忌避している。その上で、青眼鏡は私というのが嫌いじゃないから、こうやって押せば簡単に折れてくれる。

一緒にお風呂なんて、中学生ぶりかな。

「ちよつと胸を揉むくらいは許される？」

「許されない」

「えー」

「そつちに揉む胸が無いから公平じゃない」

「ぶつ叩くよ？」

「縛られたまま寝る方が良いまである」

「寝てる時に何もしないとは言っていない」

「地獄しかない……」

ヘッズオアテイルズ、だっけ？ 裏か表か。壮一君の彼女さんである志保さんがよくやってる。

「……わかった、入る。入るよ」

「わーい」

「高校生にもなって……いやまあ、別に年齢は関係ないか」

「じゃ、溜めてくるから」

「解いてはくれんのか」

「うん。そのままできて」

「ひとのこころがない」

青眼鏡から降りる。んー、暑かったあ。

「……まあお風呂から出た後に悪戯しない、とは一言も言っていないんだけどね？」

こういうあくどいのは、青眼鏡譲りである。

○

お風呂から出た後、私達は隣り合わせに眠った。

暑いのは重々承知で、けど、久しぶりだったから。

特に何の悪戯もする気はなかった。起こすのは悪いし、青眼鏡もゆっくりしに来た、と言っていたし。勉強頑張ってるからなあ。まあ、ちよつとくらしいの休息はね。

……ただ、その髪の毛をサラサラしたり、その寝顔を眺めたりは、した。

今は青眼鏡を付けていない、素のままの風音の顔。

可愛い。キスしたい。フラれたのは事実だし、友達になってとかよくわからない事言われたけど、まあ、私が風音にソウイウ感情を持っているのは変わらないわけで。他に好きな人でも出来ない限りは、私はまだ、彼女の事が……その、好きというか、愛しているとか、そう

いうのじゃなくて、なんだろうな、うーん、愛でたくて、嫌がつてるところを見たい、みたいなの……。好きな人なんて出来るとは思えないから、もしかしたらずつとずつと、私は風音を虐め続けて……。ああ、それもいいなあ、なんて。

うーん、たまに思うけど、私って怖くない？

「……」

閉じられた口に指を入れてみる。

つぶ、と入っていく指が、閉じられた歯に当たる。そうだよ、普通歯は閉じてるか。

そのまま歯茎を撫でていく。二本目を入れて、三本目。唾液でべたべたになるのも気にせず、指を増やして、もう片方の指もつかって唇をうによんうによんする。

ハッ……。悪戯する気はなかったのに、これって紛う方なき悪戯では？ アニーナは訝しんだ。

「汗……。かいてる。舐めてみたい、とかは流石に変態だよ……。うう、ニヤンさんめ、無駄な知識を……」

あの人のせいで、えつちな知識が沢山増えてしまった。前まではなんとも思わなかった風音の部位や仕草にドキつとすることが増えたと、だからこそフラれている事実が私を落ち込ませる。首筋とか舐めたらドン引きされるよね……。

「……ほっぺにキス、くらいなら」

ゆっくり、ゆっくり。

顔を近付けていく。

……悪戯じゃないし。これは、悪戯では、ないし。

一瞬。一瞬だけね。

ちゅ。

——その時、幸か不幸か風音が絶好のタイミングで寝返りを打ったせいで、ほっぺにするはずのキスが唇に——マウストウマウスになっってしまったのは、まあ、言わないで置くことにする。

いつもやってる嫌がらせのキスとはまた別の——誰も知らない、私

しか知らない、暑い暑い夏の二コマ。

私と風音が忙しさよりあんまり会わなくなる前の、とあるお泊り会での秘め事。

思い出として、その時の感触は今でも覚えている。

……好きな人が出来るまで。

この感触は、ずっと取っておこうかな、って。

○

「プレゼント交換会をしよう」

「交換会、とは。何、京子と壮一でも呼ぶの？」

「んーん。二人で」

「ほーん。別に良いけど。なんで？」

「クリスマスじゃん？」

そんな感じで、クリスマスお泊り会が決定した。

これもまた、高二的の冬のお話。二人で過ごす機会の減ってきた頃のお話。



大きな会場でのライブや企画などを熟しているリンリンは、それはもう多忙である。多忙オブ多忙。なんならターボ。休日は勿論、平日も歌や踊りの練習でスケジュールは詰め詰め。勿論配信活動も怠ってはならず、これだけ多忙でありながらほぼ日配信を心掛けている移動の関係などで出来ない日もある。

私は私で資格試験だとか、見聞を広めるための一人旅だとかで三連休なんかは丸々いないことが多々ある。そんな二人のスケジュールなど合致するはずもなく、あの夏のお泊り会からやろうやろうといいつつ冬まで伸びてしまった。

高二的の冬だ。来年度からは受験勉強を含む勉学に熱を入れる期間に入るため、確かにここしかタイミミングは無い。それはリンリンもわかっているのだろう、結構強引に、そして強い目で打診して来た辺り、どうしてもやりたい、という意思が伝わってきた。

中学の頃は壮一と壮一の彼女である志保さん、京子、リンリンと私でクリスマス会をやったものだけど、高校に入ってから初。ちなみに京子の彼氏はちよつとヤンチャな人なので辞退してくれた。常識のあるヤンチャな人である。

去年は土日とはいえそれなりにバタバタしていたので中止になっ

たけど、今年は三連休で、余裕がある。

あの二人を呼べないのはまあ一応思う所がなくもないけど、どっちも自分の恋人と聖夜を過ごすことでしょう。ご馳走様。

「でも、いいの？ クリスマスなんて配信やら企画やらの絶好じゃん」

「配信はするよ？ とうかスタジオ行くし」

「ウエ？」

「流星にクリスマスに何もしないのは無理だよ。リスナーさん達が待ってるし、もう告知もしちゃったし。24日はほとんどスタジオにいますと思う」

「じゃあ23日にやるの？」

「お泊り会とプレゼント交換会自体はね。でも、青眼鏡は24日も拘束させてもらいます」

「we?」

「珍しく察しが悪いじゃん」

「ついてきて、っていうんなら断るけど」

「ついてきてって言ってるんだけど」

ふむ。

ふむ?。

「確認するけど、22、23はリンリンの家で、24日だけスタジオ? についてこい、って話?」

「22、23、24全部スタジオ詰めになるから、近くのホテルと一緒に泊まって、そこでクリスマス会とプレゼント交換会をしようっていう話」

「ん~~~~」

何を言ってるのかわからないんだよなあ。

「部屋は？」

「私が出すよ」

「いや本当に行くなら払うけど、いや行かないけど」

「ベッドは一つでいい？」

「二つにしようね。行かないけどね」

「朝はビュッフェ形式らしいんだけど、会社行けばレストランあるか

らそつちでいいかなって」

「え、あの事務所レストランあるんだ」

「うん。朝8時から開いてるよ。社員の人がよく朝食食べに来てる」

「はえー、流石大手。でも私一般人だし入れないよ」

「マネさんに他社の人とコラボする時用の入館証発行してもらおうの取り付けたから大丈夫」

「やめてよそれも断れない域じゃん」

断るとマネージャーさんに迷惑かけるやつじゃん……。

いやそんなことで悪印象付かないと思うけど、将来入りたいと思ってる企業のなりたいと思ってる職業の人に迷惑かけるのは色々……。ポクポク。

メリットデメリットの天秤。

……まあ、然したるデメリットはないか。ホテルに泊まって、朝食を会社に食へに行くだけでしょ？

「わかった。じゃあ行くよ。あ、でもホテル代は自分で出すから」

「もう払ってあるし取ってあるからいいよ」

「……ベッドの数は？」

「ないしょ」

内緒、じゃないんだよ。

まあリンリンはその辺初心というか臆病なのでちゃんとベッドは二つあるだろう。なんなら部屋も二つ取っている可能性もある。

……後で払っておくか。

「じゃあ、青眼鏡。プレゼント期待してるから」

「う、そういえばそつちが主旨だった」

「サンタコスしてきてもいいからね」

「全身真っ黒のジージャンで行くわ」

「不審者扱いで捕まりそう」

そんな感じで。口約束で決まったクリスマス会は、なんだか波乱が起きそうな、起きなそうな。



莊嚴――。

寒空を裂くガラスの柱。超大手事務所のビル。社名の連ねられた看板には、D I V A L i V I V Aの文字もある。勿論、だけど。勝手知ったる、といった様子で入り口の方へ向かうリンリンに慌ててついていく。流石に来たことの無い場所で、大企業に入るとなれば緊張もする。こちらら高校二年生の女の子だぞ！

「り、リンリン。ちよつと待ってちよつと待って」

「何?」

「ほんとに言ってる? ここ入るの?」

「え、うん。……えー、もしかして青眼鏡、怖がってる?」

きよとんとした顔から一転、ニヤアと口の端を歪めたリンリンが、小首を傾げて覗き込んでくる。うわ、一番見せたくない相手に弱みを見せてしまった。でも緊張するものはすると思うんだ私。

リンリンはふむ、と一つ思案をしたあと、手を差し出してきた。

「怖いなら、手、繋ぐ?」

「なんなら背負ってくれても」

「足持って引き摺って行ってあげてもいいんだけど」

「歩きます」

ちよつと落ち着いた。

自動ドアを抜けて大きなロビーに入る。物凄く開けた場所で、幾つかのエレベーターとエスカレーター、その隣の辺りにInformationがある。冬の空気が唐突に暖房の利いたそれになり、身体がぶるりと震えた。

リンリンは受け付けにずんずん歩いていくと、二、三、言葉を交わし、首掛けのカードホルダーを受け取った。

「はい、これ」

「これがゲスト入館証?」

「うん。ちゃんと首にかけといてね」

「うい」

guestと書かれたそれを首にかける。

……これが将来、社員証になるのかなあ、って。勉強頑張ろう。

「青眼鏡？」

「あ、今行くよ」

いつの間にか扉の開いたエレベーター前に移動していたリンリン。その居住まいに不自然な点はなく、堂々としている。あの日完璧に割り切ったからシヨックは無いけれど、やっぱり私が全てを知っていたリンリンはもういなくて、私の知らない、成長したリンリンになっているんだなあ、と、感傷。

……なんなら、私なんかよりよっぽど社会経験を積んでいるんだ。少なくともこの場においてはリンリンに習う姿勢で行かないと。こんな……大人たちに囲まれて、日々を過ごしているんだもんなあ。

「青眼鏡、早く乗って」

「うい」

怒られた。



「美味しい……」

「でしよう」

「何故に自慢気」

案内されて入った社内レストラン。既にまばらに人がいて、皆私を見て眉をひそめたあと、その隣にいるリンリンを見て納得の表情をसरる。

「特にこのサーモンが美味しい」

「うむうむ」

「バイキング形式も出来そうな広さだね」

「歓迎会とか、イベントがあるとビュッフェになるよー」

「……？」

ん。ん？

「リンリン」

「なんだね！」

「ああ、そういう」

「わかっているなら無言が吉!」

こつちが、ここでの”いつものリンリン”なワケね。うん、よく見
てる子だ。

Vの姿になる時だけテンション上げるんじゃないかと、会社に来たら
最初から上げてるわけだ。その方が気合も入るだろうし、隙もなくな
るし。……というかめちやくちや過激なのは私に対してだけで、学校
でもああいうリンリンだから、うん、そう、気を許してくれているの
だと思おう事にしよう。

顔を上げる。

そこに、もうめちやくちや”秘書! って感じの女性がいた。スー
ツと眼鏡。ちよつと憧れ。

「NYMU、ここにいましたか」

「あ、おはようマネさん!」

「おはようございます。それで、そちらの方が……」

「初めまして、NYMUの友人の新舞といえます。この度は入館証の
発行、」

「ふふ、そこまでかしこまらなくて大丈夫ですよ。私はNYMUのマ
ネージャーを務めています。麻比奈と言います。新舞さんは今回はN
YMUの友人としてきてくださったと聞いています。緊張している
かもしれませんが、リラックスが大事です。イベント、頑張ってください
さいね」

「あ、ありがとうございます——イベント?」

ん?

ん??

「あ、ほ、ほらマネさん! 花ホルダーさんに依頼してたヤツどうなっ
たのかな!」

「……NYMU。サプライズと報連相の欠落は違う、と何度も伝えた
と思いますが」

「今日! 今日説明するから! ね? 今はね?」

なるほど、犯人はリンリン一人と。マネージャーさんもハメられた

側ね。了解。

さて。

「どの暴露がいい?」

「やめて!」

「色々仕入れてまつせ……。直近のだと、体操服後ろ前逆事件とかどうだろう」

「やめてって!」

ふふふ、こちとら友人。ええ、ええ、何でも話せますよリンリンの覚えてない事も。

「青眼鏡、あとでね」

「わあ怖い」

本当に怖い。

「申し訳ございません、NYMUがご迷惑をお掛けします……」

「あ、いえいえ。慣れてますので」

「ああ、そうですね。付き合えば貴女の方がずっと長く……」
「そうなんですよ。リ……NYMUとは中学からの付き合いなんですけど、もう四六時中一緒にいる時もあって」

「ふふ、元気な彼女と一緒にいるのは楽しそうですが、振り回されて大変でしょうね」

「あー、まあ……大変ですねえ」

しみじみと。

ちら、とリンリンを見れば、わあ冷たい視線。テンション下げ下げじゃないですかあ。

「NYMU、花ホルダーさんの件は資料を送っておきました。依頼は快諾していただけましたので、確認を」

「はい」

「それでは、新舞さん。是非、楽しい時間を」

「ありがとうございます」

……うむ。うむ。

レナさんとも、みくさんとも毛色は全く違うけれど、出来る大人、つて感じが凄い。カッコイイ人、つて感じで憧れるなあ。マネー

も。でもあんな公の場で恥ずかしい話をするのは違うと思うんだ。あそこにいた知り合いみーんな、体操服後ろ前逆だったの知っちゃったよね?」

「べ、別にそれくらいカワイイ、で済むんぎゅ」

「やめてね?」

「んんん」

顔の横に突かれていた手とお腹にあった手、どちらもで私の顔を挟んで、物凄い力で締め付けてくる。小刻みにコクコクと頷くけれど、リンリンはそのままキス顔を作って……ぬあああ。

「んー、一般ホテルだけど、ホテルで二人つきりって、ちよつと良い響きじゃない?」

「同意がないので悪い響きです」

「同意するまでキスしてほしいってこと?」

「解放してほしいです」

解放してくれた。

「それで、イベントって何」

「あー。まあ、察してると思うけど、箱内でクリスマス交換会があつてね。それが終わった後、サプライズで友人呼んで交換会、みたいな予定だったんだけど……バレちゃったし」

「なるほど。私配信に出たくないって言ったよね?」

「うん。聞いた。だからサプライズ」

「うーんそれはドツキリというんだよなあ」

それもタチの悪いヤツ。

「わかってる上でのサプライズはうーん、だよね」

「まあ、そう。ぶっちゃけ驚ける自信はない」

「青眼鏡そもそも声に抑揚ないもんね……」

「それは悪口」

人が気にしている事を!

「またゲームする?」

「クリスマスにボコボコにされろってこと?」

「いいよIvs7でも」

「前勝てなかったじゃんそれ」

「じゃあ今から考えてよサプライズ。楽しみにしてるから」

「ん。わかった」

ベッドに寝転がる。結構な緊張から解放されて、疲労が如実である。

なんとというか、リンリンは凄い環境にいるんだなあという思いと、気軽に送り出したあの時の私に色々思う所がないでもない。

リンリンも少しの間思案顔だったけど、同じようにベッドに寝転がった。勿論、二つあるベッドのそれぞれに。

お互い横向きになって、向かい合って。

「……ねえ、青眼鏡」

「何だね」

「さっきの私、変だった？」

「さっきの、っていうと、つまりNYMUちゃんなリンリン？」

「ん」

少しだけ不安そうに。リンリンは問う。

「全然。いつも見てるNYMUちゃんだったし、いつも学校で見てるリンリンだったし、私の友人のリンリンだったよ」

「そっか」

「気にしてるんだ、猫被ってる事」

「少しね」

んーっ、と伸びをする彼女は、寝返りをして窓の方を向いた。金髪が揺れる。

「別に元気な自分も、冷静な自分も自分だと思っただけどき。いいのかな、って思うことは有るかな。なんか嘘ついてるみたいで……」

「でもリンリン、学校でもあんな感じじゃん。アタリきつい私にだけじゃん」

「……でも、ほら、青眼鏡に会う前……友達いなかった頃の私は、もっと暗い性格だったでしょ。みんなの前だから、って理由でキャラ作ってるとも言えない？」

「それが成長じゃないの？ 暗い面を見せたって周囲は暗くなるだけ

だよ。それは知ってるでしょ。だからリンリンの明るい面だけをみんなに見せて、周囲も明るくなってる。それがリンリン、君が成長して獲得したスキルだよ。出来るようになった事。陳腐だけどき、優しい嘘ってヤツだよ。あるいは需要と供給」

起き上がって、リンリンの方へ。

頑なに顔を見せない彼女の金色の髪を、サラサラと撫でてみる。

「何」

「偉いね、って」

「……」

「なんかさ、レストラン入った時も、受付の時もそうだったけど、社員さんがリンリンの事みると”ああ、いつものか”とか”NYMUちゃんは今日も元気でいいねえ”みたいな視線がチラホラあつてさ。流石に全員じゃなかったけど、物凄い人数の大人たちがみーんなリンリンの事”元気なNYMUちゃん”で認識しててさ。ホント、すごいなあって」

「……」

「頑張ってるね」

よしよし、と頭を撫でり撫でり。撫でりこ撫でりこ。

ぐい。手首をつかまれ、引っ張られた。

「ぬわ」

咄嗟に手をつくけど、当然、リンリンの頭部に顔を近付ける形になる。

金色の髪の毛が眩しい。髪の間から、リンリンの耳が見える。

「子供扱いしないでよ」

「まだまだ子供だよ、リンリンは」

「……じゃあ、青眼鏡も子供」

「うん」

その青い目が、可愛い顔が、こちらを向いた。文字通り目と鼻の先に目と鼻がある状態。

「大人になっても、一緒にいようね」

「勿論」

二人の顔はそのまま近づいて——あ、起き上がろうと思ったのに腕が、というか首の後ろに手を回されて、あぁっ！

●
翌日の夜。

結局サプライズはゲームになった。何も思いつかなかったらしい。FPSバトロワゲームと、大混戦するスカッシュなゲーム。前者は協力一戦、後者は視聴者参加型で五戦。

『友人サンタから勝利という名のプレゼントをもぎ取ろう』のコーナーは、サンタの一人勝ちに終わった。1vs7の大混戦FF無し。サンタは一機さえ失わず。圧勝オブ圧勝である。

その結果に満足いかなかったらしいリンリンはパーティーグッズより手錠、足枷、バランスボールなどのリアルハンデをサンタに課すも、敢え無く敗戦。最終的に取り出した伝家の宝刀アイマスクにてようやく辛勝を得た。7人の内の6人が落とされた時点のことである。

クリスマス企画はそれで終わり。勿論締めだとか挨拶だとか告知だとかはちゃんと済ませて、先に帰る……事無く待っていたサンタと共に、ホテルへ帰る次第となった。

「お疲れ様ー」

「お疲れ」

カチン、とグラスを当てる。勿論ただのジュース。

窓際に置かれたテーブルと椅子に向かい合って座って、夜景を眺める。ビジネスホテルじゃなくて普通に質の言いホテルだったのがびつくりぎやうてん。

ちまちまとお菓子やおつまみをつつきつつ、ゆっくりする。

「友達出来た？」

「何にも」

「ああ、まあ、青眼鏡だもんね」

「なんだとうー！」

まあ出来るだけ接さないようにした、というのが大きい。オタクな

ので、知りたくないという部分が大きい。おかげで怖がられた感じがないでもない。悪印象云々の話はどこへいったのか。

「でも楽しかったよ。なんか、異文化交流ってレベルで色々知れた。知識の裏付けになった感じ」

「技術さんに口出した時少しヒヤツとしたけどね……」

「あの人とは配信始まる前にちよつと話しててき。唯一口出しにける人だったのがデカイ」

「いつの間に……」

ドマイナー資格試験の同好の士だった。やっぱり自己紹介の時にドマイナー珍妙資格を提示するのは良好なコミュニケーションを作るな、って。

口出したと言つてもちよつと断線箇所指摘をしただけで、調整だとか修正に横暴な態度を取ったわけではない。そんな知識ないし。いずれは勉強するつもりだけど。

「……あー、それでね」

「うん？」

「えーっと」

歯切れの悪いリンリン。ちよつと頬が赤い。

「どしたん、湯あたり？」

「あの……その」

「んー、それじゃ、はい」

バッグから、紙袋を取り出す。そういうことでしょ、多分。

「う、流石にわかる？」

「まあね。そもそも最初はそういう話だったし」

あと椅子の下の紙袋見えてるし。

「じゃあ、プレゼント交換会。といつても二人だけだから、はい、どうぞ」

「ん。じゃあコレ、どうぞ」

「ういうい」

紙袋を渡し合う。一応ラッピングしてもらったソレは、15 x 30 x 8 cm程の直方体の形をしている。リンリンから貰ったプレゼント

トは、何かしらに包まれた赤い袋。紙袋 in 袋。

「開けても良い?」

「もち」

別に良いのに丁寧にラッピングを向き始めるリンリン。そういうところ、律儀だよなあ。京子辺りならビリッビリに破くだろうに。壮一もこのタイプ。

私は破きます。

「これ……ペンタブ?」

「うん。液タブは流石にプレゼントとして重すぎるし持っていけなかったけど、これならいい感じかなって。配信でお絵描きしたりするの見てるけど、マウスで描いてるじゃん? リンリンの絵は……その、上手いかどうかは置いておいて、そっちのが描きやすいかなって。ちなみにこれ防水で洗えるから」

「……実用性が高すぎる」

「ちなみにお絵かきソフトの利用権3ヶ月分もつけといた。それ以降使うかどうかは任せる」

「ん。ありがとう」

「うい。じゃ、こっちも開けるゾイ」

「開けてー」

大切そうに箱へ仕舞い直してくれる様を見届けつつ、赤い袋に手を掛ける。

結んである紐をほどいて……ぱあ。

「……オルゴール、かな? 丸いのは初めて見たけど」

「よくオルゴールだってわかったね」

「重さと音でだいたいね」

「それはちよつと怖い」

球形の、ぱかつと開くオルゴール。

開くと天井側に巻き鍵があったので、一つ、二つと巻いてみる。

流れるのは――。

「NYMUちゃんのソロ曲?」

「うん。一番初めに出したオリジナルソング」

「へえ、こんなのがあったんだ。グッズ？」

「んーん。非売品。一点物」

「ワアオ」

付加価値やば。

いや売らないけどさ。

「ありがとう。大切にするよ」

「ん」

この曲好き、って言ったの、覚えてたのかね。

リンリンにしてはロマンチックなことをするものだ。とか思っちゃったり。どちらかと言えば私の方がロマンチストだから、なんか新鮮。

互いのプレゼントを丁寧に包装し直して、一息。

「もう一回、乾杯しようよ」

「いいね、なんかカッコイイ」

「そう言う事言わない方がかっこいいのに……」

グラスを重ねる。

「メリークリスマス」

「ハッピークリスマス」

コツン、とグラスのベルを鳴らした。

友人に乾杯。

○